

2014 アドベンチャーレーシングジャパンシリーズ (ARJS) 長州大会

藤井 善浩

花背トレイルラン大会の運営委員長をしていました藤井です。トライアスロンのクラブに所属しているにもかかわらずアドベンチャーレースを3年前からやっております。花背の翌週に日本のアドベンチャーレースの1つとしてアドベンチャーレーシングジャパンシリーズ (ARJS) があり、第3戦の山口県長州大会に出場してきました。

アドベンチャーレースとは、男女混成のチームが一丸となって、動力を使わずに自然環境に合わせた多様なアウトドアスポーツを駆使して、自然の中に定められたチェックポイントを地形図とコンパスを使用して自らのナビゲーションにより通過しながらゴールを目指す冒険レースです。自然と調和し、仲間と協力し合うことが求められます。

種目はマウンテンバイク (MTB)、オリエンテーリング (OL)、シーカヤックで2日間行われます。種目の順番は当日の競技説明で発表され、それによって準備物も変わってきます。配布された地図は9枚、それぞれ1日目と2日目のチェックポイントが記載され制限時間によってコースも変更されたり減点対象になるためチーム内で入念な作戦を立てていきます。

1日目と2日目の間には睡眠時間もありますが、場合によってはノンストップになることも予想されました。

1日目

11月1日の午後4時にMTBからスタートし途中OLに変更、その後MTBにてスタート地点に戻り終了というコース。スタートから雨で山の中も霧とドロドロのコンディション。直登でぬかるんだ山道をMTB担いで登ろうとするが、ビンディングシューズでは滑り落ちてしまう状態。

チームメイトはどんどん先に登っていくが私は立ち往生、その間に他チームは自転車を置いて登っていく。

ポイントを取ったらすぐにMTBを取りに戻り舗装路で次のポイントに行く作戦のようだが私たちのチームはそのまま山づたいにポイントを取りにくく作戦。

全てにおいて八方塞がりな私のところにチームメイトが戻ってきてMTBを担ぎ上げてくれる。そして滑りながらも登ることが再開でき、無事にポイントまでたどり着ける。しかし、その後の下山ではMTBは乗れない状態のコンディションで結局は山道をMTB担いで降りることになる。

で、ハプニングが、、、担いで降りている最中に足を滑らせ転倒。この時左手がありえない着地をしてしまい左肩からパキッと音がし激痛が走る。チームメイトは先に行くし雨の音は強いため大声で「ストップ」と叫ぶ左腕が痛みのため挙げられない。体重が載せられない。



ここでリタイヤ確定が決まりそうだったけど、とにかく下山しないと救助も来ないということで、ゆっくりと下山していく。しばらくすると痛みが和らぎ、痛みが出る方向がわかってくるため、痛みがでないように注意を払いながら前進していく。

下山後、まだ大丈夫ということで続行するが、連日の仕事の激務と寝不足のため頭がぼーっとしてくる。おまけに MTB を漕いでもいつものように回せない。転倒したために体がおかしくなったのか？と不安になってくる。チームメイトはもちろん先に行っては待っていてくれる。その繰り返しで脚を引っ張り続けてしまう。

そして、異変が、MTB に乗りながら寝落ち寸前になる。漕げない、そのため脚も攣る、寝てしまいそう。なんとか気力だけでついて行き 0L セクションのトランジットに 21 時の制限時間の 30 分前に到着。これ以上は我慢が出来ずチームメイトに異常なほどの睡魔に襲われており、この状態で山に入ると滑落する危険性があるので 5 分だけでも睡眠を取らせて欲しいとお願いし泥まみれの所でパックパックを枕にして寝る。

MTB にビンディングシューズをくくりつけていたチームメイトが急に騒ぎ出すが、私にとっては遠い音にしか聞こえず後から聞いた話ではタヌキにシューズを奪われたらしく追いかけてまわしたそうです。無事に回収はできたものとても珍しいハプニングでした。

5 分経過し 0L セクションに出発するが濃霧のためヘッドライトは真っ白で何も見えず、ハンドライトで足元を照らしながら地形図とコンパスを頼りにして進んでいき難くクリアする。再び MTB セクションになり、MTB に乗れるのかと思いきや全く乗れず担いで移動。

21 時の閉門にクリアできたチームは 12 チーム中 6 チーム。現段階で 5 位。この 6 チームが思っていたこと「0L でもキツイのに、ここは MTB セクションにする必要があるのか？」

全員が同じ事を言っていました。なぜなら、沢下りだったのです。MTB 担いで沢を下るとは、本当に意味があるのでしょうか。。おまけに MTB が傷だらけになりました。

極限状態に追い込まれた上にこの仕打ち、イライラの頂点に達しましたが、ここは楽しむしかないのだなと切り替えるようにしながら沢下り敢行し切り抜ける。そのあとは舗装路でスタート地点まで戻れば本日は終了となるが、時計は既に 2 日目の午前 2 時

2 日目は午前 4 時 30 分にシーカヤックの準備物の提出時間となっている。間に合うのだろうかという不安が頭をよぎるが睡魔に襲われ、MTB 居眠り運転をして側溝に何度も落ちかける。

無事にスタート地点に戻ってきたのが午前 3 時 30 分 5 位で 1 日目終了となる。私はその場でへたりこんで寝てしまう。。気がついたら 10 分は寝ていたようです。

すぐに準備されている晩御飯？というか



朝御飯？になるのか、カレーライスをいただき準備物の提出を済ませて2日目のバスの出発時間まで残り45分あったのでシーカヤックの格好（ウエットスーツ）になり20分ほど寝る。

1日目の種目を終えて帰ってきたら上位3チームと関門にひっかかった6チームが「おはよう。よく寝たわ」と言ってくるのが悲しかった。私たちより後ろのチームはシーカヤック出発時間に帰ってきたため、十分な準備もできずバスに乗り込んで行く。

2日目

バス移動は作戦タイムとなるのですが、1時間の移動工程は貴重な睡眠時間となる。シーカヤック出発場所に着くと波は大荒れ強風と最悪なコンディション。選手全員がこのセクションはキャンセルになると確信しつつPFDジャケット（ライフジャケット）などを装着して主催者のキャンセルという情報を待っていました。

漁港から主催者は船を借りてくるのですが、漁船はすべて出港しないという事になっていたようですが、主催者は距離を短くしても決行するという信じられない判断が下され、午前6時に一斉にスタートする。



荒波に揉まれながらチェックポイントに向かうが、私のチームは遅いため最初の説明されたポイントがどんどんキャンセルされしまい、同じところを行ったり来たりしながら無人島に向かえという事になる。本当に死ぬのではないかと思いつつ必死に漕いで無人島を目指してポイントを取って元の場所に戻ればいいのかと思ったら、サーフィンポイントは変更なしという耳を疑う主催者の指示が出される。

波が高くてサーフィンがしやすいので想像通り波が高く必死に向かうと近くのカヤックから再出艇が厳しいぞと教えてもらう。チェックポイントにたどり着く前に砂に埋まっているテトラポットが出現し激突するかもという危険ポイントが発生するが波が押し寄せることによりクリアしそのままの勢いで砂浜に到着する。

用意されていたシーカヤックは1人艇、2人艇、3人艇と種類があり、チームによっては1人艇と2人艇で出艇するチームや3人艇で出艇するチームがあります。サーフィンポイントからシーカヤックゴールに向かうには荒波に負けずに漕いで沖に出なければなりません。波が強く激しいため1人艇は安定しないため出艇できず立ち往生するチームが続出。

出艇を諦めるチームや自作カヤックで挑んだチームは荒波に揉まれて破損しリタイヤ。私たちは3人艇だったため重く安定していたので前2人が必死に大声を出して漕いで、最



後尾1人が舵取りを行い無事に沖に出ることができました。荒れ狂う波に翻弄されながらも大声で掛け声を出し無我夢中に漕ぎまくりゴール手前までやってくる。

しかし、沖からの風と波にテトラポットに吸い込まれそうになるためゴールに向くことができず沖に一度出て修正してからゴールを目指すことになる。この時のカヤックのスピードは時速1kmという歩くよりも遅い記録をたたき出す。

無事にゴールの浜にたどり着くと3人が喉カラカラと必要以上の体力を使い、ヘタリこんでしまう。出た言葉は「生きてた」のみ。スタッフに海での事を必死に話そうとするが興奮しすぎてよく分からず。とにかくシーカヤックセクションは終了したので、残すは制限時間も設定されていないMTBでオリエンテーリング。急いで着替えて更に漕ぎにくくなったMTBを必死に操って2人について行く。



最終ポイントは沢に生えている檜にポイントをつけているという説明を受けていたが、

どこを探しても見つからず、沢と尾根の切り替わりそうなギリギリのところを野生の勘で歩いていると、なんと杉の木に取り付けてあった。説明をきっちり聞いていたのになぜ?と思いながら大声で「あったぞー!!」と叫んでしまい、他チームもゾロゾロよってきてしまった。。肝心のチームメイトは一番後ろにいたので、私はみんなを助けるハメになってしまった。これで全てのポイントを通過し、睡眠時間無く約22時間動きっぱなしでゴールする。

スタートラインに立つまでに、チーム探しやシーカヤック練習を行いそれぞれの性格や得意、不得意をそれぞれが把握して挑んだだけに、やりきったという達成感を本当に味わうことができました。苦しい時や危険な場面に直面してもお互いを信じ行動する大切さを学びました。アドベンチャーレースは個人ではできないチームでやるもの。そのため「個々の人間性が問われ、己を振り返る機会を与えられる」という醍醐味を味わえる最高のアクティビティです。

結果は12チーム参加6チームリタイヤ完全完走6チーム。12チーム中6位。年間ポイント総合順位30チーム(ぐらい)中6位という成績で今シーズンを終えることができました。

長文になりましたが、読んでいただきありがとうございます